

(ニュースの扉)ハービー・山口さんと歩いた総文祭 心のピント、合わせる場

7月27～31日、第38回総文祭が茨城県で開かれた。写真部門の選考委員長は、被写体の心に入り込むような人物写真で知られるハービー・山口さん。29日の撮影会に参加したハービーさんは、対高校生でもそのコミュニケーション能力をいかに発揮した。

*

撮影会は他にひたちなか市・大洗町、筑波山の2コースも設定されていたが、ハービーさんが選んだのは笠間市。焼き物や座頭市の故郷で知られる街だ。

最初は班ごとの記念撮影。ハービーさんは「キラキラと言いながらレンズの奥を見てね」と、のっけからキレイに写されるコツを伝授している。

圧倒的に女子が目立つ。人だかりの中で愛用のライカの説明をしつつ、さりげなくケースの裏に書かれたサインを見せる。「これは福山雅治さんの。彼のケースには、ぼくのサインがあります」。一帯がキャー、ワーツとわいた。

*

■山口の目 人生の可能性、カメラで広げて

初めて総文祭の審査委員長を務めましたが、高校生の写真はいい。感覚に素直。指導の先生にもお願いします、うまい写真に走らせないで、と。とたんにつまらなくなる。

ぼくらが高校生の時と一番変わったのはカメラ。そして女子部員の多さです。昔は機械いじりの好きなメカ少年が集まっていた。それがデジタルになってぜんぶカメラがやってくれ、現像も印画紙も必要なくなった。プリクラ(写真シール)や携帯電話、スマホで撮り慣れた女の子たちがどっと入ってきたね。

確かにシャッターを押せば撮れるけど、メカやコンセプトについて知っていればもっと世界は広がります。さっきも絞りを手動にして撮るとか、水の反射や影だけで構成することを教えてあげると、女子生徒が驚いていた。

それにしても、今の子は幸せですよ。その場ですぐ、こう撮るとこう写る、が分かる。指導もパツとできる。印画紙代もかからない。

デジタルの時代になって、カメラはコミュニケーションの道具としての機能面がとにかく増大しましたが、固定観念をほぐし、可能性を広げる機械でもあるんです。

写真で食っていきたい子には、荒廃した心を癒やし、地球を平和にする作品を撮れるよう、失敗を恐れず、あきらめず、ふんばってほしい。一方で、表現はどれも不得手、楽しみは写真だけって子もいるでしょう。総文祭に来て、写真を介し仲間と交流してほしいですね。

◇

はーびー・やまぐち 1950年生まれ。東京経済大卒業後、ロンドンに約10年滞在し俳優として活動。帰国後、独特の人物写真で注目を浴びる。2011年、日本写真協会賞受賞。

◆キーワード

<総文祭> 文化庁、公益社団法人全国高等学校文化連盟などが主催し、朝日新聞社などが特別後援する「全国高等学校総合文化祭」の略称。年1回、夏に開かれ「文化部のインターハイ」と言われる一大イベントだ。

今年の「いばらき総文2014」には約2万人が参加。文芸や新聞、郷土芸能、美術・工芸など19の規定部門と特別支援学校、ボランティアなど四つの協賛部門に分かれて県内17の市町村で開かれた。

選考や勝敗を伴う部門と交流だけの部門があり、写真部門は、寄せられた作品からハービーさんと写真家の榎並悦子さんが選んだ。文部科学大臣賞受賞作などを含む入選の300余点は、総文祭開催の間、つくば市の茨城県つくば美術館で展示された。

「確かにシャッターを押せば撮れるけど、メカやコンセプトについて知っていればもっと世界は広がります。」「カメラはコミュニケーションの道具としての機能面がとにかく増大しましたが、固定観念をほぐし、可能性を広げる機械でもあるんです。」

ツールはそれをより深く知ることによって私の可能性を広げてくれる。